

王徳威著 神谷まり子・上原かおり訳

抑圧されたモダニティ

——清末小説新論

東方書店／2017年6月／528頁／5500円＋税



津守 陽

はじめに

本書は David Der-wei Wang (王徳威), *Fin-de-Siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849–1911*, Stanford University Press, 1997 の全訳である。現在ハーバード大学にて東アジア言語・文明学科エドワード・C・ヘンダーソン講座教授、比較文学科教授を務める著者の王徳威教授は、今日の現代中国文学研究において最も注目を集める研究者の一人と言えるだろう。膨大な読書量と鋭い問題意識に裏打ちされたその著作は、常に思ひも寄らない切り口から刺激的な提言を放ち、人文学全体におよぶ既存の研究視野を大きく揺さぶってみせることで知られる。また氏の研究は多くが英・中両言語で出版されており、英語圏・中国語圏の双方に広い読者を持つ点でも際立っている。翻って日本での出版は、これまで数篇の論文や座談記録が訳されていたほかには、単著『叙事詩の時代の抒情』(2011、書誌は末尾参考文献参照、サブタイトルは紙幅の都合により省略してい

る。以下同)、編者に名を連ねる『帝国主義と文学』(2010)が刊行されているが、単著の方は実際には一本の論文の翻訳である(英文オリジナルは2015年に大部の著書の一部として出版された)。よって著者の意図に基づいて構成されたオリジナルの単著が丸ごと全訳されるのは、本書が初めてであり、日本の読者にとって待望の一冊ということができるだろう。

さて今回の、と言っても評者の怠慢ゆえにすでに刊行は2年前のこととなってしまったが、2017年の日本版刊行がやや特別なのは、1997年のオリジナル版、および2003年台湾版や2005年中国版から、時期的に大きく隔たっていることである。本書が王教授の一連の著作のうち比較的初中期のものであり、同時に王教授の名を英語圏・中国語圏で高めた代表的著作であること、その後現在に至るまで氏が重要な著作を続々ともものして反響を呼んでいることを考慮すると、原書の出版後にどのような動きがあったのかを含めて本書の意義を再考することが、20

年後の今あらためてこの刺激的な書物を手にした我々に求められているのではないだろうか。また邦訳刊行から2年が経過する間に、すでに行き届いた日本語の書評も出ている〔鈴木2017；石井2017〕。よってこの書評では本書の内容紹介や評価を最低限にとどめ、原書出版当時の米国や中国における書評の論点を振り返ることと、その後幅広く展開されてきた王教授の学術成果をこれら反響への応答として捉え直すこと、その二つに重点を置いて述べたい。

本書の概要

本書の構成は以下の通りである。以下〈〉内の数字は日本版のページ数を示す。

日本語版序

序

第一章 抑圧されたモダニティ

第二章 悪を誨える——花柳小説

第三章 空虚な正義——俠義公案小説

第四章 卑屈なカーニヴァル——グロテスクな暴露小説

第五章 混乱した地平線——サイエンス・ファンタジー

第六章 回帰——同時代の中国小説および清末の先例

訳者解説（神谷まり子）

日本語版序では、英・中両言語版の出版以後起こった批判的反響を著者が概括したのち、「様々な声の飛び交う中国近代文学の起源」〈v〉を再現するという本書の意図の有効性があらためて主張される。つづいて序では、五四新文化運動のパラダイム以降、清末小説が単なる伝統の終焉期や近代への過渡期とみなされて

きたのに対し、本書ではそこに驚異的なまでの「文化横断的で、多言語的な対話」の実践〈4〉、もう一つの「華麗なる」モダニティの開花を見出す、という宣言がなされる。この目論見の根底にあるのは、非西洋の近代経験を、単一の理想的な西洋近代を後追いついていくものに過ぎないとみなしてきた、単線的な「遅れたモダニティ」観への挑戦である〈6-9〉。

本文は、総論となる第一章、清末小説の四ジャンルを考察する第二～五章、清末小説から20世紀末中国（語）小説への継承を論じる第六章の三部に分かれる。第一章では既存の文学史を批判的に再考する立場から、本書の論じる「抑圧されたモダニティ」が説明される。著者は、単線的な理想の「近代」を追い求める中国の「不安」が、清末小説が生成した内的反応としてのモダニティを軽視させ、清末小説に複数の近代の競合を見る視点を「抑圧」してしまった、とする〈23-29〉。また後半では、清末のモダニティの内実が、「啓蒙と頹廢」「革命と内に向かう発展」「合理性と情感の過剰」「ミメーシスとミミクリ」の四つの側面に分けて語られる。それぞれの対の前者となる啓蒙・革命・合理性・ミメーシス現実描写は、既存の文学史観が「近代性」の指標としてきた基準であり、五四以降の新文学がそれを追求・体現してきたと考えられてきた。それに対して後者の頹廢・インボリユーション内に向かう発展・情感の過剰・物まねは、著者が第二～五章での分析を通して清末小説に見出す特徴である。従来は清末小説に対する負の形容として用いられてきた後者の語群を使用しながらも、同時にその価値判断をことごとく顛覆させ

る作業を通して、著者は清末小説のカーニヴァルの「逸脱」や「墮落」、「悪さ」や「失敗」こそが、「清末小説の最も過激で、「創造的な」部分」〈52〉なのだと言張する。

第二章から第五章は、本書の核となる清末小説の具体的な検討である。すでに訳者の神谷氏による解説や鈴木・石井両氏の書評が的確に指摘するように、本書の最大の意義が、「保守的で低俗な文学として否定されてきた清末小説」（訳者解説）に新しい光を当て、それら「世紀末ならではの猥雑さとデカダンスに満ちあふれた妖しい物語」〔石井2017〕にこそ、「不気味でエネルギーな怪物」にも等しい「中国モダニティの活力源」〔鈴木2017〕が潜んでいたという、新しい見方を提示した点にあることは疑いもない。第二～第五章で展開される、綿密な個別テキストへの分析と再評価が、この見通しを重厚に支えている。そして第六章では、抑圧されてきた清末のモダニティとひそかに呼応しあう存在として、台湾・香港を含む20世紀末の中国（語）文学の可能性が論じられる。

不安な論述の魅力

清末から近代に至る中国文学史のパラダイムを揺るがそうとする本書の試みを、フーコーやバフチンなど本書で自由自在に援用される西洋文学理論の枠組みとともに、いかにも「ポストモダンの」と見る批評は多い。評者の感触を付け加えるとすれば、本書をより魅力的に、またいかにもポストモダンの、そして出版20年後の今なお刺激的にしている点として注目に値するのは、むしろこう

した脱構築の試みそのものよりも、個別のテキストに即して既存の価値判断を覆していく際の、先の読めない論述の方にこそある。

第二～第五章に見えるような、清末小説の四つのジャンルを章ごとに論じる一見わかりやすい構成とは裏腹に、英中両言語にまたがる言葉遊びや語義の顛覆を繰り返しながら展開される著者の議論は、時に目眩すら覚えさせるカーニヴァル性に満ちている。著者は決して清末小説を一絡げに「墮落」「猥雑」「グロテスク」の範疇に入れて安心しない。ある時はセクシュアリティの過剰からポルノと批判されてきた小説を、むしろ快楽を少しもかきたてない性の欠如とみなし（『九尾亀』）、ある時は公的正義と俠客の美学の小説における融合を、むしろ法的・詩的正義の無力化の証とみなす（『老残遊記』『活地獄』）。あるいは、過酷な社会現実を批判した側面が評価されてきた暴露小説を、むしろ語り手すら含むすべての価値観をグロテスクな歪曲で笑いのめすファルスとして評価する（『二十年目睹之怪現状』『官場現形記』）。こうした手続きのなかには、一見墮落と見られがちな同性愛小説（『品花寶鑑』）を、むしろ性の固定化を補強する保守性の表れと見た上で、さらにその度を越した保守への信奉が、むしろ恋愛表象における男性中心主義的幻想を暴く反逆性を帯びさせたと言及するなど、油断ならない顛覆に次ぐ顛覆を経るものもある。

一つ一つのこうした「読み」が、どこまでもテキストに即し個別対応的であるがゆえに、時に大きな「顛覆」の目論見へとどう繋がるのか、読んでいて目標

を見失う不安を感じさせることすらある。しかしこの「読み」の膨大な積み重ねは、第一義的にはテキストをろくに読まずに批評することへの厳重な抗議となるのみならず、個々の「読み」が導く場所へしか足を向けるつもりはないとでも言いたげな、既定の結論を一直線に目指すことを拒む論述スタイルをも作り上げている。いわゆる議論の落としどころを予測させない論述に付き合うという、不安なこの読書体験そのものが、清末を眺める際に「その後の近代化」を予定調和的に想定してしまう後世のまなざしをリセットし、複数の可能性が競合しあった時代の熱気を肌身で追体験させるためにあるのではないか、そんな意味での批評対象と批評行為の間の「呼応」すら感じさせる。

中国での反響——モダニティの定義

日本語版序でも、また東京での書評ワークショップ¹⁾においても、著者は英文版・中文版出版後の反応を紹介している。それによると、主な批判は本書が「五四新文学の伝統を卑しめ」、「二〇世紀中国における文学とイデオロギーの「近代化」計画とその成果を否定」〈iv〉しようとしている、というものであり、特に中国の学界から上がったその声は、日本の読者が想定する以上に大きいものであった、と著者は匂わせる。それでは実際に英文版・中文版はどのような反響を得たのか。書評論文を中心に、少し現地の感触を探ってみたい。

まずは中国での反応について。本書の中国版出版は2005年だが、1998年にはすでに、序文が著者の中国大陸における

初の論文集『想像中国的方法』に、第一章が王曉明主編『批評空間の開創』に、それぞれ収録されている。本書の基本構想は、「没有晚清，何来“五四”？」（序の初出時副題）という、実にキャッチーで挑戦的な命題とともに、英文オリジナルとほぼ同時期に中国語圏にも紹介されていたことになる。

刊行当時大きな反響を呼んだ本書、および先に刊行された序・第一章への書評は数多い。李楊・季進のように高く評価するもの、背景知識を整理しながら深みのある批評を展開する林分份・夏偉・季劍青のような論評も存在する一方で、厳しい批判も少なくない。批判の部分を集約してみると、概ね次の3点にまとめられる。

- (1) 五四新文学の単純化・過小評価 [王曉初2007; 汪2017; 江2017]
- (2) 「近代化」の起源を五四から清末に前倒ししたのみで、単線的な歴史観を脱却できていないこと [冷2002; 王曉初2007; 汪2017; 夏2017]
- (3) 「モダニティ」「モダン」の定義および価値判断の曖昧さ [冷2002; 林2005; 王曉初2007; 汪2017; 江2017; 夏2017]

まず(1)は著者自ら代表的な反論として認識していたものである。本書が五四新文学を啓蒙的・写實的・革命的側面に絞って単純化し、その多元性を無視しているという批判は複数の書評に見える。著者は本書で「五四文学をあえて低く評価しようというわけでもない」〈29〉と述べているし、各章末の議論では必ず魯迅・郁達夫・老舍・沈從文といった近代作家たちの名を挙げて、「抑圧された

モダニティ」の五四以降への継承面を強調しているが、その一方で「清末（前近代、豊富なモダニティ）、『五四』（近代、一つのモダニティへの限定）、二〇世紀末（ポストモダン、豊富なモダニティの再来？）」（411-412）といった見取り図をほのめかすなど、「五四」の単純化と受け取られるのも止むを得ない部分もある。後述するように、(1)に関して著者はその後の仕事で少しずつ応答と補足を行っているように見受けられる。また(2)は(1)とともに文学史区分に深く関わる問題であり、この指摘自体、80年代以降の「重写文学史」（文学史の書き直し）の動きを背景に持つ。ただし本書の意図を、中国の「近代」に単一の「起源」「起点」を探す考え方そのものの解体にある、と見る指摘の方が、より著者の意図を汲んでいると言えるだろう〔李2006〕。

(3)は管見の限り最も多くの批判が集まる点である。例えば王曉初書評は著者が「抑圧されたモダニティ」の内実を「中国の文学伝統における一種のやむことのない創造力」「新を求め変を求め努力」とみなし、かつ清末のそれが重要なのは「国際的対話状況」（いずれも中国版からの評者訳）に入っていたためであると位置付ける一方で、同じく世界との対話から新しさを求めたはずの梁啓超ら改革派による「新小説」に「モダニティ」を見出そうとしないのは矛盾である、と批判する。

評者の見るところ(3)の批判は、「序」における中・英版の乖離にも起因している。中文版は序のみ著者による翻訳であったことが「中文版序」に記されてい

るが、その際著者は中国語圏読者に向けた比較的大きな修正を行ったようである。そして中国における書評の多くが引用する箇所は、往々にして英文版から大きな修正を加えた箇所と合致している。例えば汪書評が批判する中国版5ページ20行目の「モダン」の定義付けの部分や、王曉初書評が批判していた6ページ10行目からの、清末に「モダン」「モダニティ」を見出す根拠説明の部分などは、英・日版とかなりトーンが異なっている。概ね中文版の方が語句を増しているが、時に英・日版に存在している、魅力的かつ率直な叙述——例えば、「近代の持つカメレオンのような性質」(7)や「わたしはモダニティの論争を歴史化すべきだと主張しているのであり、これこそが本書のねらいなのである。……それらは近代を歴史化しておらず、むしろ近代（および自らを）を社会の進歩と究極の優位性の、居心地良い物語の到達点に置いてしまっているのだ。モダニティを神話化するのはいこれらの記述、つまり直線的で予想可能な時間によって形成される、大きな物語なのである」(7)など——が中文版で削除されていることもある。

確かに英・日版でも、序と第一章を読む限りにおいて、著者の「モダニティ」をめぐる定義や議論には不明瞭な箇所が多く戸惑う。ただし第二章以降を追っていけば、清末小説のどのような性質を「抑圧されたモダニティ」と再評価しようとしているのかは見えてくる。著者は序や第一章では「新しさ」(new)「異質さ」(difference)「革新的」(innovative)「急進的」(radical)「革新」(renovation)「変化」(change)「文化横断的で多言語

的な対話」(crosscultural and interlingual dialogue) といった、やや抽象的で進歩主義的にも見える用語で、清末の「モダニティ」を指し示している。しかし第二章以降の議論で実際に重視されているのは、清末小説が(作者たちの意図にしばしば反して) 体现している、パラドックスやジレンマ、破壊と維持あるいは暴露と隠蔽の間で揺れ動く曖昧さ(ambiguity)、情感やレトリックの過剰(excess)、意義の無化(dissipation) や不確定性(uncertainty)、パロディや滑稽の裏の不安(anxiety)、といった特徴である。これらを「モダニティ」と呼ぶべきか否かはまた別の問題であるが、本書と建設的な議論を交わそうとするならば、著者が個別テキストから見出したこれらの特徴をどう評価するのかという議論こそ、今後も深める余地を残していると言えるだろう。先行して紹介された序と第一章の総論部分に中国での議論が集中しやすいことは、序の中・英文版の間の差異と相まって、中国語圏からの批判を引き起こす素地を作ったように思われる。

米国での反響——審美判断の根拠

米国を中心とする英語圏の書評論文を見てみると、本書が「清末」の時期を拡大し、その小説の特徴を「モダン」とみなしたという時期区分に関わる異議申し立ては、中国ほど目立たない。論者によって批判のポイントがかなり異なっていてグループ化しづらいが、やや共通の土台を持つと思われる批判を3点拾い上げてみたい。

- (4) 五四新文学の単純化・過小評価 [Tang 1998; Ip et al. 2003]

- (5) 文学作品の読みを歴史叙述に対して優越させすぎている [Tang 1998; Hutters 1999]

- (6) 「弱い思想」や「個人」を、国家・社会・政治に対して特権化しすぎている [Tang 1998; Hockx 1998; Ip et al. 2003]

中国のそれと共通するよう見える(4)だが、中国での議論が、五四以降の新文学にも「生生不息の創造力」や「衆聲喧嘩^{ヘテロフォニア}」はあったことを無視している、という作品評価を基調とする傾向にあるのに対し、米国での批判は研究史・思想史的立場に寄っている。中国・米国における中国研究の文脈と既存成果を踏まえながら、Tang は本書が魯迅・胡適らの清末小説研究を軽視することを問題視し、Ip らは「全面西洋化」と取られやすい五四時期の文学創作が、実際には伝統との複雑な対峙から発生したという面を、本書が隠蔽していると批判する。中国での批判があくまで「中国の知識人」という立場から為され、五四(とその神格化)の延長線上に立っている印象を与えるのに比べ、米国での批判は、清末を中国の近代化段階のどこに位置付けるべきかという、より俯瞰的な歴史学的興味に基づいているように見える。

歴史学的な問いの立て方は、(5)にも反映されている。(5)は中国でも「歴史を文学化している」「想像史学」という批判を受けた点である [冷2002]。この批判に対し、季進および林分份書評は「“文学史”の目的は文学史料に対する実証的な叙述をすることだけにあるのではなく、文学フィクションの生命力やそこに映し出される歴史の光と影をはっきり

と見すえることにある」(『現代中国小説十講』序)、あるいは「歴史や政治の叙述が映し出す中国よりも、小説が照らし出した中国の方があるいは真に迫っているかもしれない」(『小説中国』序)という著者の主張を反証として引く[季2004; 林2005]。近年の著者の研究にも通底しているこの野心的な宣言は、文学研究者ならば少なからず強く惹きつけられるポイントだろう。しかし英語圏での次作にあたる *The Monster That Is History* (2004) への Arif Dirlik の書評が(5)に類する批判を行っていることを考えると [Dirlik 2005]、本書における「モダニティ」の濫用と同根の問題点として、歴史学的立場からの厳しい眼差しが注がれていることは否めない。審美的な判断による文学の「モダニティ」と、社会・政治的システムとしての「モダン」の成立は、本当に切り離して論じることができるのか。フィクションがイデオロギーの道具に成り下がらないための担保はどのようにして可能となるのか。林および Tang の書評が指摘するこれらの難題は、本書の欠点というよりは、挑戦的な本書の姿勢によって鮮烈に浮かび上がった、今日まで続く課題ということができるかもしれない。

(6)は審美的判断の基準をどこに置くのかに関わる問題である。Hockx は好意的な論調ながら、「抑圧された声」をすくい上げるのが文学、という定義はあまりにも西洋的ではないのかという疑問を提示する。Ip らは本書が個人の性愛や逸脱への欲望を肯定する一方で、国家や革命に注ぐ情熱という形を取る個人の「欲望」を無視している、と批判する。確

かに本書における著者の姿勢には、すべての価値観と戯れようとする姿勢を貫く一方で、「抑圧された」周縁的存在だけは無条件に肯定する傾向が認められる。その背後には、本書のそこかしこに顔を出す、「文革」および「六四」への生々しい記憶と強い非難が、くっきりと影を落としている。この課題については著者の中でも、「情ある歴史」を描き出そうとする最新作 *The Lyrical in Epic Time* (2015) など近年の成果において——Ban Wang の書評などがやはりこの課題を批判的に指摘しているとはいえ [Ban Wang 2015]——継続的な模索が続けられているように見える。

前後の軌跡——継続する対話

最後に、著者の研究の全体像から、本書への反響に対する応答の跡を辿ることで本書評を締めくりたい。本書の「訳者解説」が紹介する通り、主な単著だけで英文著作4冊(いずれも台湾あるいは中国で翻訳が出版済み)、中文著作(英文版からの翻訳を除く)13冊にのぼる著者の研究視野は、きわめて多岐にわたる。また小説選や文学史編纂といった編者・選者としての仕事も、決して「副業」的な位置付けにはない。本書が「同じ組上に載ることのなかった異なる時空間の作品を、一つのテーマのもとに比較分析する」(訳者解説)という、意図的な「時代錯誤」の手法を取ることと、膨大な中国(語)小説の海からテキストを選んで並べるという行為は、著者の中で同等の重みを持って行われている。

著者の2000年代までの成果については、すでに高嘉謙氏の論考が的確に整理

している²⁾。高氏は著者の仕事を「小説中国・華語想像」「清末小説・抑圧されたモダニティ」「歴史・暴力・後遺民」「抒情の伝統・中国のモダニティ」という四つの側面から紹介している。この整理と分析に基づきつつ、評者なりに組み替えた五つのキーワードから著者の研究視野をごく簡単に振り返ってみたい。なおそれぞれのキーワードに最も関係すると思われる編著書を挙げているが、実際には複数の視野にまたがる著作がほとんどであることを補足しておく。

(1) 小説中国——フィクションと歴史の間の緊張関係

中国・台湾・香港、あるいは東南アジアや米国など広い国や地域にまたがる中国語創作を、19世紀後半から今日に至るまでの広いスパンで視野に収め続けようとするのが、著者の研究視野の最大の特徴と言える。その最も基本的な動力になっていると考えられるのが、文学／フィクションにしか描けない歴史を描き出すという信念である。「小説中国」——「小さな」説である小説が、「大きな」歴史叙事には語りえない「中国」を語るという、単著タイトルのダブルミーニングにその野心は明らかだろう。本書『抑圧されたモダニティ』を含め、多くの著書の序でこの信念は繰り返し触れられている。*Fictional Realism in Twentieth-century China* (1992)、『小説中国』(1993)、『想像中国的方法』(1998) など。

(2) 衆聲喧嘩^{ヘテログロシ}——モダニティの複数性

本書が複数の声を再現しようとした対象は清末小説であったが、本書以前では中国・台湾・香港を含む広い同時代小説を、また本書以後では、本書で単

純化していると批判を受けた「五四」を含む「近代中国文学」をあらためて対象に据え [王徳威2019]、「ヘテログロシ」性に満ちた見取り図を描き出すプロジェクトが現在まで続いている。その発想の源として、通常指摘されるバフチンのカーニヴァル論以外に、カオス理論の文学への応用〈65〉といった自然科学からの啓発が働いていることは、中国語圏や日本の中国文学研究には珍しい特徴として興味深い³⁾。*Fin-de-Siècle Splendor* (1997)、『如何現代、怎樣文学?』(1998)、*A New Literary History of Modern China* (2017)、『五四@100』(2019) など。

(3) 華語想像——華と夷の弁証法

近年、より意識的に議論の場の構築が目指されているのが、「華語」による創作、サイノフォン文学（華語語系文学）の視野である。サイノフォン文学の研究視野における王徳威教授の立ち位置については、山口守・濱田麻矢両氏の論考に詳しい [山口2015; 濱田2016]。本書第六章の扱う範囲からも、国籍や政治体制を超えた大きな枠組みから中国語・華語の小説を論じようとする意図は明らかである。ただし「華」の内実を多様化しようとする試みは、ややもすれば「華」のウチとソトを区切る境界線を強化し、「華人世界」を拡大しようとする野心にも見えてしまう。山口・Dirlik 両氏の論考が批判するこの危うさは、「大中国」の語りより現実味を増す今日において、本書出版時よりも重くのしかかっているだろう。このジレンマに向き合う近年の姿勢として、著者は「華」と「夷」が絶え間なく交錯する弁証関係を、「華」

をめぐる考察の場に描き出そうとしているように見受けられる⁴⁾。『跨世紀風華』(2002)、『華夷風』(2016)など。

(4) 歴史の傷跡と後遺民——ディアスポラのポリティクス

前述の山口氏論考では、史書美氏の論点と対比させて、王徳威氏のディアスポラ論述への親近性が指摘されている。「華」の内実を多様化する試みといい、中国や台湾の「郷土／原郷」叙事への着目といい、確かに著者は「華人・華語」をめぐるディアスポラの言説に多大な関心を寄せ続けている。中国(人)や台湾(人)が近現代史で負った傷跡と、その文学における表徴に焦点化した *The Monster That Is History* も、おそらく著者のアイデンティティときわめて近い立ち位置から成立しているものと思われる。ただし、ともすればノスタルジックな語りに落ちやすいこの視野にも、徹底した相対化と脱構築の眼差しは注がれ続けており、それがもっとも先鋭に現れているのが『後遺民写作』である。過去の記憶に「正統性」を探る「遺民論述」が蔓延する「兩岸」のポリティクスを、対抗言説を築くことで否定するのではなく、空虚な時空に「正統性」を欲望する「後遺民」の語りを小説から拾い上げることで、乗り越えようとする。ディアスポラ言説そのものを批判するのではなく、内部に深く掘り込むことで逆に掘り崩そうとするようなそのアプローチには、文学作品と社会現実とのパラドキシカルな呼応に着目する本書のそれと深く通底するものがある。*The Monster That Is History* (2004)、『原郷人』(2004)、『台湾』(2005)、『後遺民写作』(2007)など。

(5) 情ある歴史——現代中国の抒情の系譜

近年集中して発表されている「抒情」をめぐる研究は、(1)の信念を複雑化させる試みに見える。著者がもし完全に「革命文学と叙事詩の時代が終始押し留めきれなかった響き」[高2011]として近代中国の「抒情の系譜」を見出しているならば、それは(1)の魅力的だが同時にやや楽観的な文学観を継承したと受け取られても止むを得ない。しかし高氏が続けて指摘するように、著者は江文也・胡蘭成を案件とすることで、詩学と政治との間に、より「複雑かつ曖昧な」関係を描きだそうと試みている。『抒情伝統与中国現代性』(2010)、『現代「抒情伝統」四論』(2011)、*The Lyrical in Epic Time* (2015)など。

派手な擾乱の裏の当事者性

以上、多岐にわたる著者の問題提起と研究成果を振り返ってみると、一見それぞれ無関係に延びているように見える広い関心が、いずれも本書『抑圧されたモダニティ』の中にその萌芽を持っていたことがわかる。著者は最近の論考でも本書への批判に対して強気的反駁を行っているが[王徳威2019]、むしろ本書の出版後20年の間に出された数々の編著書からは、「近代中国文学像の単純化」「文学と歴史、革新と伝統との相互関係の平板化」「個人経験の特権化」「華の覇権化」といった批判・難題に真摯に向き合い、模索を続けてきたことがうかがえる。

これらの難題への取り組みは、実は著者のこだわりの裏返しでもある。フィクションを読む行為への信念、「華」人た

ちの「傷」や「情」への注視、1949年の「大分裂」・文革・「六四」など苦痛に満ちた歴史記憶との関わりは、もしもそれらを捨て去ることができていたならば、よりラディカルかつ客観的な、批判の余地の少ない批評行為が可能となっていたかもしれない。しかし軽やかな戯れの中にこれらを脱ぎ捨てないところに、著者は自らの当事者性を意識的に置いているように見える⁵⁾。その立ち位置は、「中国（語）」を常に自分自身のこととして内側から考えていく傾向の強い中国の研究視野とも、また客観的な俯瞰のスタンスを取りやすい米国の研究視野とも、それぞれに対話を築くことのできる、一種のはざまにある。夏偉の評は著者に対する「脱構築は得意だが構築はおろそか（善於解構而疏於建構）」という批判の存在をほのめかすが、すべての価値観を派手に擾乱してみせるような著者の手法の裏には、はざまの立ち位置から「チャイニーズであること」を見つめ続けようとする、根気強い対話の姿勢が見え隠れする。それはもしかしたら近代以降連綿と続く「中国という強迫観念」の別の姿に過ぎないのかもしれない。しかし同時に、研究する主体と研究対象との間に生じる息苦しいまでの緊張関係は、日本の中国研究者にも鋭い問いを投げかけてくるように思われる。

注

- 1) 2017年7月22日、東京大学駒場キャンパスにおいて日本版刊行を記念して行われた。
- 2) 高嘉謙「抒情の伝統と現代文学——王徳威の人と仕事」〔王徳威著、三好章訳

2011: 123-136〕参照。

- 3) 近代以降における自然科学的な認知と人文学の知の呼応については、愛知大学における2018年の座談会でも議論されている〔鄭毓瑜・王徳威ほか2019〕。
- 4) この視野は、2018年の愛知大学における著者の講演「華夷の変——中国研究の新しいビジョン」（国際シンポジウム「グローバルな視野とローカルの思考——個性とのバランスを考える」2018年7月）で提示されている。
- 5) 「国外から中国の作家を批評することの面白さと危うさ」、その「当事者性」について、濱田麻矢氏が興味深い考察を行っている〔濱田2016〕。

参考文献

〈日文〉

- 石井剛 2017 「百年を跨いで照らしあう二つの「世紀末の輝き」 王徳威著『抑圧されたモダニティ』（書評）『東方』442号、2017年12月、pp.30-34.
- 王徳威著、三好章訳 2011 『叙事詩の時代の抒情——江文也の音楽と詩作』研文出版
- 王徳威・廖炳惠・松浦恆雄・安部悟・黄英哲編 2010 『帝国主義と文学』研文出版
- 鈴木将久 2017 「中国特有のモダニティの多様なあり方を見出す 王徳威著『抑圧されたモダニティ』（書評）『週刊読書人』2017年8月25日
- 鄭毓瑜・王徳威ほか 2019 「中国近現代の知識経験と文学表現をめぐって」『中国21』Vol.50、2019年3月、pp.3-28.
- 濱田麻矢 2016 「内外東方学界消息 中国現代文学研究の新しい地平——ハーバード版文学史の試み」『東方学』第132輯、2016年7月、pp.88-97.
- 山口守 2015 「中国文学の本質主義を超えて——漢語文学・華語語系文学の可能性」『中国——社会と文化』30、2015年

- 7月、pp.18-44.
 〈英文〉
- Dirlik, Arif 2005 “Review: The Monster That Is History: History, Violence, and Fictional Writing in Twentieth Century China by David Der-wei Wang”, *The American Historical Review*, Vol. 110, No. 5, Dec. 2005, pp. 1504-1505.
- Hockx, Michel 1998 “Review: Fin-de-Siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911 by David Der-wei Wang”, *Journal of the Royal Asiatic Society*, Third Series, Vol. 8, No. 3, Nov. 1998, pp. 502-504.
- Huters, Theodore 1999 “Review: Fin-de-Siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911 by David Der-wei Wang”, *The Journal of Asian Studies*, Vol. 58, No. 1, Feb. 1999, pp. 173-174.
- Ip, Hung-Yok, Tze-Ki Hon and Chiu-Chun Lee 2003 “Review: The Plurality of Chinese Modernity: A Review of Recent Scholarship on the May Fourth Movement: Fin-de-Siècle Splendor by David Der-wei Wang; Translingual Practice by Lydia Liu; Shanghai Modern by Leo Lee; Becoming Chinese by Yeh Wen-hsin”, *Modern China*, Vol. 29, No. 4, Oct. 2003, pp. 490-509.
- Tang, Xiaobing 1998 “Review: Fin-de-Siècle Splendor: Repressed Modernities of Late Qing Fiction, 1849-1911 by David Der-wei Wang”, *Harvard Journal of Asiatic Studies*, Vol. 58, No. 2, Dec. 1998, pp. 623-630.
- Wang, Ban 2015 “Review: The Lyrical in Epic Time: Modern Chinese Intellectuals and Artists Through the 1949 Crisis by David Der-wei Wang”, *Chinese Literature: Essays, Articles, Reviews (CLEAR)*, Vol. 37, Dec. 2015, pp. 218-220.
- Wang, David Der-wei 1992 *Fictional Realism in Twentieth-Century China: Mao Dun, Lao She, Shen Congwen*, Columbia University Press.
- Wang, David Der-wei 2004 *The Monster That Is History: History, Violence, and Fictional Writing in Twentieth-Century China*, University of California Press.
- Wang, David Der-wei 2015 *The Lyrical in Epic Time: Modern Chinese Intellectuals and Artists Through the 1949 Crisis*, Columbia University Press.
- Wang, David Der-wei, ed. 2017 *A New Literary History of Modern China*, The Belknap Press of Harvard University Press.
- 〈中文〉
- 季劍青 2015 「什麼是“現代文學”的“現代”？——中國現代文學起點問題的歷史考察和再思考」『文學評論』2015年第4期
- 季進 2004 「文學譜系・意識形態・文本解讀——王德威的學術路向」『當代作家評論』2004年第1期
- 江臘生 2017 「什麼“現代性”，如何“壓抑”——評王德威的“被壓抑的現代性”」『中國文學批評』2017年第4期
- 冷露 2002 「評王德威“被壓抑的現代性”說」『中國現代文學研究叢刊』2002年第2期
- 李楊 2006 「“沒有晚清，何來‘五四’”的兩種說法」『中國現代文學研究叢刊』2006年第1期
- 林分份 2005 「史學想像與詩學批評——王德威的中國現代小說研究」『當代作家評論』2005年第5期
- 王德威 1993 『小說中國——晚清到當代的中文小說』麦田出版
- 王德威 1998a 『如何現代，怎樣文學？——十九、二十世紀中文小說新論』麦田出版
- 王德威 1998b 「被壓抑的現代性——沒有晚清，何來“五四”？」『想像中國的方法——歷史・小說・敘事』生活・讀書・新知三聯書店。單行本收錄時には「導論

- 没有晚清，何来“五四”？」と改題。
 宋偉傑訳 2005 『被压抑の現代性——
 晚清小説新論』北京大学出版社
- 王德威 1998c 「被压抑の現代性——晚清
 小説の重新評価」王曉明主編『批評空間
 的開創——二十世紀中国文学研究』東方
 出版中心。単行本（2005）収録時には
 「第一章 被压抑の現代性」と改題。
- 王德威 2002 『跨世紀風華——当代小説
 20家』麦田出版
- 王德威 2007 『後遺民写作』麦田出版
- 王德威 2010 『抒情伝統与中国現代性
 ——在北大的八堂課』生活・読書・新知
 三聯書店
- 王德威 2011 『現代「抒情伝統」四論』
 国立台湾大学出版中心
- 王德威 2019 「没有五四，何来晚清？」
 王德威・宋明煒編『五四@100——文化，
 思想，歴史』聯経出版
- 王德威編選・導読、黄英哲・黄美娥編選顧
 問 2005 『台湾——從文学看歴史』麦
 田出版
- 王德威・黄錦樹編 2004 『原郷人——族
 群的故事』麦田出版
- 王德威・高嘉謙・胡金倫編 2016 『華夷
 風——華語語系文学読本』聯経出版
- 王曉初 2007 「褊狭而空洞の現代性——
 評王德威《被压抑の現代性——晚清小説
 新論》」『文芸研究』2007年第7期
- 汪衛東 2017 「“晚清現代性”の悖論与盲
 区——以《被压抑の現代性——没有晚
 清，何来“五四”？」為中心」『中国文学
 批評』2017年第4期
- 夏偉 2017 「“吊詭”在晚清与“五四”之
 間——論王德威《被压抑の現代性》之得
 失」『南方文壇』2017年第2期